

『ふたり』

著作 a s h

この作品は『痕』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.2）を元にした創作です。

もうすぐあの人に会える。

わたしにはそれがよく分かる。

もう一人のわたしが、それを告げている。

わたしともう一人のわたしが、その人の名を呼ぶ。

“次郎衛門”

耕一さん

ポツリ…。

雨？

わたしの頬に落ちた雫。

でも、冷たくもなく、痛くもない。

何？

『ふたり』

ああ……わたしは今、何かに支えられている。支えられなければ、わたしの体はこの星の重力に逆らう事なく、崩れ落ちるだろう。

わたしを支えているのは……とても暖かく、力強い腕だった。

そうだ。この腕はあの人の腕。

わたしの頬に落ちた暖かい雫は、あの人の涙。

わたしに向かつて、一生懸命何かを語ってるのは、あの人の。

わたしは薄れ行く意識の中、もう一度あの人の顔をしっかりと見つけたいと思った。

そして、目を凝らしてみれば、そこには、あの人の泣き顔があった。

あの人……耕一さんの……。

わたしははっとして、もう一度目を開くと、そこには見慣れた自分の部屋。

夢だった……そう思ったと同時に、その夢が現実とはならない事を願い、傍らの時計を見る。

四時十分。

またこんな夢を見てしまった。

それは、もう一人のわたしが見せる記憶。わたしが楓と言う名ではなく、エディフェルと名乗っていた頃の。

“もうすぐあの人……次郎衛門に会える。今度こそ……今度こそ、この想いを伝えたい”

頭に響く声。これは夢の続き？

いいえ、もう一人のわたし。

『ふたり』

わたしの心を突き動かすもの、それはエディフェルの気持ち。

エディフェルの気持ち…それはわたしの気持ちでもある…筈だった。でも、わたしはその気持ちを耕一さんに打ち明けられない。

わたしは楓。

エディフェルじゃない。

“一緒。次郎衛門を想う気持ちは変わらない”

いいえ、わたしは次郎衛門を好きになったんじゃない…。

わたしが好きなのは、耕一さん。

“それは次郎衛門の事”

違う…違うのよ、エディフェル。

あなたはわたしじゃないし、わたしはあなたじゃない。

そして、耕一さんも次郎衛門じゃない。

“違うない、一緒”

違う、違う。違うのよ…。

だって…

もう、同じ事を繰り返したくはないもの。

だから、わたしはあなたとは違う。

“でも、約束した。必ず再び出会うと”

駄目なの…。

あなたがそうして次郎衛門を呼び続けると、それは耕一さんの中に潜むエルクウをも呼

『ふたり』

び覚ましてしまう。

“次郎衛門はエルクウの力を持っていた”

今的那个人は次郎衛門じゃない。

エルクウの力を制御できるとは限らないの。

“次郎衛門は強かった”

やめて。

“次郎衛門は美しかった。他のエルクウよりも”

やめて、やめて！

“次郎衛門は暖かかった”

やめてちょうだいっ！

わたしは楓。エディフェルじゃない。

“エディフェルはわたし。でも、カエデもわたし”

わたしはエディフェルなんかじゃない…。

柏木楓と言う一人の人間のの。

“それは違う。エディフェルはカエデ。カエデはエディフェル”

でも……、

わたしはエディフェルとしてでなく柏木楓として、耕一さんの事が…好き。これはエディフェルの記憶なんて関係ないの。

“エディフェルはカエデ。カエデはエディフェル”

耕一さん……

『ふたり』

わたしは一体どうしたらいいの？

間近にあなたを見た時、わたしは何と言えばいいの？

次郎衛門？ それとも耕一さん？

あなたは…耕一さんですよね？

幾ばくかの時間が過ぎて、わたしはいつも通りにベッドから起き出して、パジャマのまま洗面所へと向かった。

梓姉さんはもう朝食の支度をしているらしく、台所の方から鼻歌らしいものが聞こえてきた。時折、初音の声もする。どうやら二人ともご機嫌らしい。

明日には耕一さんがこの家にやってくる。初音は以前から楽しみにしていたし、梓姉さんだって、言葉に出さないけど嬉しいに決まってる。

わたしは？

わたしは……複雑だった。

耕一さんに会うのは…とても嬉しい。でも今会ったら、すべてを話してしまいそう。わたし…エディフェルと次郎衛門の事。そして、耕一さんの中に潜むエルクウの事。

“伝えなければ分らない”

いいえ、エディフェル…それは違うのよ、やっぱり。

わたしはもう一人のわたしに言い聞かせながら、洗面台で顔を洗う。

“すぐそこにあの人がいるのに、何もできないのか”

ええ、そうなの。

『ふたり』

わたしは何もできない。

ただ待つしかない…。

これまでがそうだったように、これからも。

「あら、楓、早いね」

不意にわたしに向かつて声がする。

水に濡れた顔をそのまま声の方に向けると、そこには少し眠そうにした千鶴姉さんがいた。最近仕事で忙しいらしい。

「千鶴姉さん…おはよう…」

「あなたも梓たちのようにはしゃいでるのかしら？」

微笑みながらわたしにそんな事を言う千鶴姉さん。

「え…はしゃいでるなんて…」

「ふふ、いいけど、まずは顔を拭きなさいね」

そう言って千鶴姉さんはわたしにタオルを手渡してくれた。

「あ、ありがとう」

千鶴姉さんのタオルはほんのりと優しい香りがした。わたしがそれで顔を拭いた後、千鶴姉さんはふと寂しそうな表情で言った。

「…耕一さんが明日来るけど、あなたはちゃんとしていられるわよね？」

千鶴姉さんにはわたしの事…エディフェルの事をだいぶ前に相談した事がある。その心配ももつともだと思う。でも、わたしは千鶴姉さんの問いに答える事はできなかった。

「……」

『ふたり』

無言でうつむくわたしを見て、千鶴姉さんは一つため息をついて、言った。

「あなたも辛いかも知れないけど、耕一さんの中に潜む鬼をむやみに起こすような事だけは避けたいの……。分かってるわよね？」

うつむいたまま一つだけうなずく。

「そう……。それなら……。いいけど、くれぐれも気をつけてね、楓」

千鶴姉さんがそうまで言う理由は、わたしには痛いほどよく分かっていった。

自分の中の鬼を制御できず、苦しみながら死んで行った人たちを、わたしと千鶴姉さんはよく知ってる。

わたしのお父さんと：耕一さんのお父さん。

制御できる者かどうかは、やってみないと分からないくじ引きのようなもので、むやみに耕一さんの中の鬼を刺激する事はよくない。

でも……

“愛しい人に伝えたい”

何もかも話してしまいたい……

この想いも、過去の事も、すべて。

そうすれば……。

その想いは伝わりますよね？ 耕一さん……。

その日は、いつも以上に明るく元気な初音と、それとは対照的にいつも以上に沈んだわたしが妙な組み合わせをなしていた。

『ふたり』

そして、そんなわたしに初音が心配そうに尋ねてくる。

「楓お姉ちゃん：何だか元気ないけど、大丈夫？」

この子はいつでも優しい。

わたしはそんな初音に余計な心配をさせたくないと思うのだけど、何故かうまく答えられず、ただコクリとうなずくだけで言葉を出す事ができなかった。

初音は少し寂しそうに笑って、

「そう、それならいいんだけど……」

と、ほんのわずかに暗い表情を見せる。

叔父さんが亡くなって以来わたしがふさぎ込んでるのを、初音は気にしていた。

何故ふさぎ込んでるのか、その本当の理由は初音は知らないと思うけど、わたしの事で初音までがふさぎ込んで欲しくない。

でも、わたしには気の利いた冗談で場を和ませるなんて：できない。

結局その場もわたし一人によって、明るい雰囲気飛んでしまったみたい。

ごめんなさい：みんな……。

朝食をすませた後、わたしはいつものように仏壇の前に座って、お父さんとお母さん、

そして叔父さんに挨拶をする。

わたしに耕一さんの事を嬉しそうに話してくれた叔父さん。

わたしは叔父さんの話す耕一さんに想いを馳せ、そして、とても嬉しそうに話す叔父さんが大好きだった。

『ふたり』

でも、叔父さんはもうこの世にはいない。

自分の中の鬼を制御できなくなる前に、自ら命を絶ってしまった……。お父さんのように、仏壇の中にある位牌を見つめ、わたしは大好きな叔父さんに聞きたかった。

どうしたらいいの？

耕一さんにはどう接したらいいの？

でも、それは何も答えてくれない。

わたしの中に浮かんでくる叔父さんも、ただ優しく微笑んでいるだけで、何も教えてはくれなかった。

ただ、もう一人のわたしだけは、激しくわたしを動かそうとする。

“次郎衛門：会いたい”

彼女は泣いている…？

わたしは胸がしめつけられるような気がして、ただじっとしていた。

耕一さんが家にやって来る当日。

今日は初音や梓姉さんだけじゃなくて、千鶴姉さんもどこかソワソワして、朝からてんやわんやの騒ぎが続いていた。

「初音、客間の準備はできてるのかしら？」

「うん。昨日ちゃんときれいにしておいたよ、千鶴お姉ちゃん」

「えーっと、それからそれから…」

「だあああ、今千鶴姉が慌てたってどうしようもないだろ？ 別に大した客って訳でもな

『ふたり』

いんだしぎ」

「あら、梓はそんな事言ってる、昨日は買い物も自分で行ったりして、あなたこそ気合が入ってるんじゃないの」

「そ、それは、昨日はたまたま陸上部がヒマだったから…」

「ふふふ、梓お姉ちゃんも嬉しいんだよね」

「こ、こらっ！ 初音何言ってるのよ！」

「素直じゃないのね、相変わらず…」

「千鶴姉に言われたくはないね！」

「あらっ、それってどういう意味かしら？」

「どういう意味も何も、そのままの意味さ！」

「ちよつと梓？ 聞き捨てならないわね…」

「千鶴お姉ちゃん…梓お姉ちゃん…、やめようよお……」

………

わたしの居場所はないみたい…。

姉さんたちと初音の繰り広げる喧騒をよそに、わたしは早々に朝食をすませ自室に一旦戻って行った。

まだ学校に行くには早すぎる時間。でも、何もする事もない。

わたしはベッドに腰を落として、ぼんやりと時計を眺めていた。

…今日、耕一さんが来る。

『ふたり』

嬉しいと言うより、気が重い。

今日になっても、耕一さんにどう接したらいいのか分からないまま…。

“想いを伝えればいい”

恐い。

恐いの。

“何が恐い？”

あの人にわたしの想いを伝えて…それで何もかもがうまく行くとは限らないのよ。

“でも、黙ってては伝わらない”

それは確かにそうだけど…想いのすべてを伝える訳には行かないの。

“カエデは好きなのだろう？”

それはエディフェル、あなたと一緒に。

“ならば迷う事はない”

駄目。

…そうよ。

わたしから耕一さんに近付いてはいけないのよ…。

待つの。

待つのよ…。

あの人すべてを思い出してくれるまで…。

夕方、家に戻ると、玄関に見覚えのない大きな靴があった。

『ふたり』

来ている。

耕一さんがこの家に来ている。

そう思った途端に鼓動が早くなり、何となく顔が紅潮してるのが分かった。会いたい。

会って話をしたい。

本当にそう思った。

でも、同時にわたしはこの家の中に、それまでとは違った感覚を覚えた。

わたしたち姉妹にはない感覚。かつて叔父さんの中に感じた感覚。

…かすかながら、感じたもの。

それは耕一さんの中の鬼。

間違いない。耕一さんの中に潜む鬼は明らかに成長している……。

どれくらいか強さなのかまでは分からないけど、鬼は確かに存在している。

駄目。

今わたしがあの人にすべてを打ち明けるなんて、絶対にできない。

こらえなくちゃ…。

耕一さんのためにも。

高鳴る胸を抑えるように、一つ深呼吸をする。

そして、ゆっくりと上がり、初音の元気な声がる部屋…居間を通り過ぎようとしたら、

「あ、楓お姉ちゃんお帰りなさい。耕一お兄ちゃん来てるよ！」

と、初音が元気に声を掛けてきた。

『ふたり』

わたしがゆっくりと、初音の方を見ると……

そこには、耕一さんの姿があった。

「や、やあ、楓ちゃん。久しぶりだねえ、前に会った時はまだ小さかったけど、ずいぶんきれいになったね」

その声。

その姿。

その笑顔。

何もかも叔父さんが話してくれた通り……

言いたい。

今すぐ言ってしまいたい。

でも、できない。

「楓お姉ちゃん？」

初音が首を傾げて、わたしを見ている。

そうだ。

耕一さんにあいさつをしなきゃ……

でも、何と言えがいいの？

あああ、駄目。今口を開くと、何もかも話してしまいそう……

「……」

「か、楓ちゃん？」

耕一さんが心配そうな表情でわたしと初音を見ている。

『ふたり』

違う、違うの。

あなたが悪いんじゃないんです、耕一さん。

でも…やっぱり何も言えない…。

「こ、こんにちわ…耕一さん」

決して上手とは言えないあいさつ。

でも、それが精いっぱいだった。

その場の雰囲気はやりきれなくなったわたしは、うつむいてそのまま自分の部屋へと逃げてしまった。

きつと耕一さんは気にしてるだろうな。

でも、初音がなんとかしてくるに違いない。

「ごめんなさい…」

わたしは無性に悲しくなって、そんな言葉を吐き出すと同時に、涙があふれて来て、それはしばらく止まらなかった…。

ごめんなさい、耕一さん…。

ごめんなさい、エディフェル…。

結局わたしはその後、耕一さんとほとんど話す事はなかった。

時折初音がわたしに話を振ってくれたりしたけど、それにもあいまいな返事を返す程度ですませていた。

ごめんね、初音。

『ふたり』

でも、わたしは耕一さんと平気な顔で話す事ができない。

どうしよう……

千鶴姉さんに話した方がいいのかしら？

耕一さんの中に潜む鬼の事を。

まだ、千鶴姉さんは気付いてないみたいだけど、千鶴姉さんも気にしてる筈だし教えた方がいい……。いえ、まだ早いわ。

耕一さんの中の鬼が目覚めるかどうか、もう少し待ってみてもいい……。

そう、そうよ。

そして何事も起きなければ、それが一番いいのよ、きっと……。

その夜、わたしの体はベッドにありながら、心はまったく別のところにあるみたいで、一向に眠れなかった。

当然よね……。

この家にあの人がいるんだもの。

いつものように眠れる訳がないのに……。

“次郎衛門……次郎衛門”

駄目よ、今次郎衛門を呼んではいけない……。

次郎衛門の記憶はそのままエルクウの覚醒に結びつきかねないの。

駄目なのよ……、わたしがあの人を呼んじゃいけないの。

“すぐそばにいるのに……”

『ふたり』

そうよね。

だからこそ、いけないの。

でも、何でわたしがこんな目にあわなければならないの？

耕一さん……助けて…。

知らず知らずのうち、わたしは泣いていた。

布団を頭までかぶって、丸くうずくまって、声を殺して泣いていた。

こんなに近くにいるのに何もできない自分に。

耕一さんがこつちに来て、二、三日が過ぎた。

わたしは相変わらずほとんど会話を交わしていない。何となく顔を合わせづらく、耕一さんとは朝食の時間も少しずらしているし、学校から帰ってもずっと自室にこもっている。

夕食の時には顔を会わせる事になるけど、耕一さんからわたしに話し掛ける事はなかった。ただ、わたしは自分でも知らないうちに、耕一さんをじっと見つめる事があった。

言葉で言えない分、つい態度に出してしまうと言う事だと思う。でも、それはあまりいい事じゃないみたいで、ふと気付くと耕一さんはわたしから視線を逸らしてしまう…。

何も変わりはないように思えた。

わたしが夜、自分の布団にくるまって涙を流す事も、耕一さんがわたしを避ける事も、初音のはしゃぎようも。

でも、少しずつ違っていた事がある。

千鶴姉さんも薄々感じている事で、耕一さんの中の鬼が日増しに強くなって行く事。

『ふたり』

最初はわたしのせいかとも思った。でも、何だか原因は別のところにもあるみたいで、それが何かまでは分からない。

確実に言えるのは、このままここにいると、耕一さんの中の鬼は確実に目覚めてしまうと言う事。

急がなくちや。

早く耕一さんをここから離れた場所に戻した方がいい。

でも、それでいいの？

もしかしたら、それつきりになるかも知れないのに…、わたしはそれでいいの？ …

しようがない…いいえ、その方が耕一さんのため。

そうでしょう？

…分からない”

そう…。

“カエデは嘘をついている”

え…。

“本当は一緒にいたい”

…。

“たとえ、それがどんな結果になっても、一緒にいたいと思ってる”

…当たり前じゃない！

だって、こんなに好きなんだもの、できる事ならずっと一緒にいたい…。

“もう二度と悲しい別れはしたくない”

『ふたり』

おかしいよね。

だって、わたし柏木楓にとつては、二度めじゃあないのにな。でも、わたしは心から思う。“二度と悲しい別れはしたくない”と。

でも、本当にどうしたらいいの？

もう自分でも分からない…。

誰か教えて。

わたしは…もう…堪えられそうにない。

千鶴姉さん…、初音…、梓姉さん…、叔父さん…、お父さん…

…

耕一さん…。

その日の朝。

わたしは朝食を摂った後、また自室にこもっていた。

そして、ぼちぼち出掛ける時間になると、自室を出て、仏壇の前に座った。

これもいつもの日課だけど、仏壇の前において、叔父さんの遺影を見てると、何となく落ち着ける。

誰にも何も言えない今、わたしの胸の内を明かせるのは、叔父さんだけしかいない…。

手を合わせて、じっとしていると、誰かが仏間に入って来たらしい。

ゆつくりと目を開けて、障子の方を見ると、耕一さんが立っていた…。

「や、やあ」

『ふたり』

わたしに笑いながらあいさつをする耕一さん。でも、わたしは何と言ったらいいのかわからない。

「楓ちゃんも、親父に朝のあいさつかい？」

耕一さんを見つめながら、わたしは何も答えなかった。

いいえ、答えられなかった。

時間も時間なので、ひとまずこの場から立ち去ろう。

このままここにおいて、何か余計な事を話す訳にも行かない…。そう思って、仏間を出ようとした時、わたしの手に何かの力が掛かった。

「…あつ」

思わず声が出てしまった。

振り返ると、耕一さんがわたしの手をぎゅっと握っている。

どうしよう……。

わたしの心臓は一気に高鳴りを始めていた。

耕一さんは一体何をする気なのかしら…。わたしの中に不安と期待のようなものが生まれて、激しく対立する。

「…あの」

耕一さんが何かを言い出そうとしている。でも…やっぱり今は何も言えない…。

わたしの口からは何も話せはしない。

それに、さっきから握られてる手に一層力が入っているみたい…。

「…痛いです」

『ふたり』

「あつ、ゴ、ゴメン！」

耕一さんは慌てた様子でわたしを解放してくれた。わたしは何も言えないまま、部屋から出ようとした。

その途端、

「待って、楓ちゃん！」

と言いながら、耕一さんがわたしの腕をぐいっと掴んできた。

わたしが振り向くと、すぐに解放してくれたけど、その目は何かを言いたそうにしていた。

…どうして？

…何故わたしを止めるの？

…あなたには何も話さないと決めたのに……。

「…なんですか？」

極力自分の感情を出さないように言葉を絞り出す。

無表情と思われてもいい。

無感情と思われてもいい。

そうでもしないと、わたしの決意はもろく崩れそうだったから…。

「もっと、話をしよう」

話をしよう？

「楓ちゃん、もっと、話をしよう？　こんなじゃ、お互い何も分からないままだ。…少なくとも俺には、聞きたい事や話したい事だって、たくさんあるんだ」

『ふたり』

「……」

わたしは何も答えられない……

「……楓ちゃん、俺の事、嫌いかい？」

……えっ！

わたしは耕一さんの突然の問いに、胸が詰まる思いだった。

それこそまさに晴天のへきれきと言うのかしら……

“好きだ”

そう、嫌いなんてそんな事、ないっ！

嫌いだなんて……。

そんな事……あなたの口から聞かされたくはない……。

「俺が嫌いだから、話をするのが嫌なのかい？」

違う！

違うの、耕一さん。

ゆっくりと左右に首を振る。

駄目……

今まで抑えてきたものが段々止められなくなっているような気がして……。

「それって、別に俺の事嫌ってる訳じゃないってとつてもいいのかな？」

どうしよう……

いまさら嘘をついてもしょうがないし……。

少し迷ったけど、わたしはコクリとうなずいた。

『ふたり』

「ホント!? よかった! 俺、てっきり楓ちゃんに嫌われてるものだと思ってたから嫌ってなんか……。」

あなたの事を嫌ってる訳がないでしょう?

だって…“わたしはずっと”待ってたのに……。

初音や姉さんたちのように、あなたが来るのを楽しみしていたのに…。

…どう言えばいいの?

わたしは今の気持ちをどうあなたに告げればいいんですか、耕一さん…。

「…楓ちゃん。…君は、あの頃から何も変わっちゃいないよな? ずっと、俺の知ってる楓ちゃんのままだよな?」

ええ、変わってません。でも…あなたは昔とは違う。

エルクウも何も関係なかった頃とは違う…。

「…耕一さん」

まっすぐに耕一さんを見つめて、わたしはゆっくりと喋り出した。

一気にまくしたてれば、今まで抑えてきたものがすべて流れてしまいそうが必要以上に間を空ける。

「わたしは…」

一瞬、わたしはためらいを感じていた。

今、耕一さんに話していいの?

いいえ、もう話すしかないのよね……。そうでしょ?

「…わたしは何も変わってません。…変わったとすれば、それは…あなたの方です」

『ふたり』

「変わったって？ 俺が？」

わたしの言葉に、耕一さんは驚きの表情を隠せずにいる。

「例えば、どの辺が？」

どの辺…って、それは、あなたの中…。

でも、これ以上は言えない。

「今は、まだ…」

「今はまだって…」

困ったような表情をしている耕一さん。

ごめんなさい…。

あなたに“すべてを打ち明けたい”…。

いいえ、すべてを打ち明ける事はできなくても、耕一さんにはここから早く去るように

言わないといけない。

ここにいては、あなたの心の中の鬼は日増しに強くなって行くだけ…。

自分の中の鬼を御し得なかった人たちのような目にあって欲しくない…。

わたしは決心した。

「耕一さん…」

「なに？」

「今日、学校から帰ったら、少し、お話ししたい事があるんです」

「うん、わかった」

「…それでは、わたしは学校がありますから」

『ふたり』

それだけ言って、わたしはその場から離れて行った。
“次郎衛門と離れたくない”

そうよ。

分かっている。

わたしはずっと一緒にいたいと思ってる。

たとえばそれが過去の記憶によるものでも何でも、わたしはあの人に抱きしめて欲しいと思ってる。

エディフェルとしてのわたしと、楓としてのわたし。

どちらもわたし。

だから、分かるでしょう…エディフェル。

わたしとあなたは、二人で一人。

でも、耕一さんは耕一さん。次郎衛門じゃない。

耕一さんが次郎衛門として、耕一さんとして、わたしを見てくれたら…きつと、わたしは一人になれるよね…。

耕一さんと結ばれる事はなくても、いつかエディフェルと次郎衛門の想いは果たされる…。

だって、約束したもの…。

また出会うって。

そうでしょ？

『ふたり』

“ 耕一さん…
次郎衛門…”

(了)

『ふたり』

後書き

『ふたり』

『痕』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.2）より、

「楓と仏間で会話する耕一」のシーンまでの楓の話

解説：『ふたり』と言うタイトル

この作品のタイトルで言う『ふたり』は誰と誰の事か？

それは「楓とエディフェル」です。

そして「楓と耕一」であり、「エディフェルと次郎衛門」であり、「耕一と次郎衛門」でもありません。

過去の想いと現世の自分。そして想い人。

楓は耕一を、エディフェルは次郎衛門を想い、そのどちらもが一對一なのにそれは一人の想いだけでない。

だから、『ふたり』なのです。

解説：過去と現在

前世の悲恋を成就させる話と言うのは、かなり好みの分かれるところのようですが私自身は結構好きだったりします。そうでなければ、この作品も書き上がるはずもないのですが、過去の想いがあるがなかるうが、人を好きになるのに理由はありません。

『ふたり』

楓が耕一に惹かれて行ったのは、エディフェルの記憶がそうさせたのではなく、楓の好きになった人が、前世で因縁のあった耕一だったと言う事なのです。

単なる言葉の言い換えに過ぎない、詭弁かも知れません。でも、現実は今を生きるのはエディフェルでも次郎衛門でもありません。楓であり、耕一なのです。惜しむらくは、ゲーム本編・楓シナリオの耕一の行動が「次郎衛門としての記憶がそうさせた」としか言えない展開になっている事でしょう。

解説：エディフェルの存在

この作品に出てくるもう一人の楓、エディフェルですが、この存在は「楓の中にエディフェルと言う人格が潜んでいる」と言う訳ではありません。

それではエディフェルとして語っているのは何なのか？

それは楓です。エディフェルと言うエルクウの娘ではなく、柏木楓と言う一介の女子高校生に過ぎません。

うまく表現できませんが、エディフェルは楓の中にある耕一に対する思慕の念を具現化したもの…とでも言うっておきましょう。

コメント

さて、今回の話はゲームのシナリオの流れに沿うように書いたつもりですが、いざ書きあがってみると、少し違和感を感じる事があるかもしれません。

でも、私はずっと気になっていたので。

『ふたり』

仏間での耕一との会話シーンで、耕一に「俺の事嫌い？」と聞かれた楓ちゃんの心中はどんなものだったのだろうか……。

私はその時の楓ちゃんを思うと、思わず涙ぐんでしまいます。それでその辺の葛藤や自分の想い（エディフェルとして語ってるのも、結局は楓ちゃん自身なのです）を抑えようとする彼女の姿を描いてみたい。

そうした思いの結果がこの作品です。

……もし、少しでも、楓ちゃんの切なさが伝われば……言う事ありません。

コメント(1999/07/28)

書式統一のための改訂ではありませんが、その作業を行ってる間じゅうずっと『光の粒』を聴いていました。やっぱり彼女（と言うかこの作品）にはこの音楽が合ってると思います。

1996/12/10 初版 a s h

1999/07/28 改訂 a s h

PDF書式変更:2016/05/12